

Title	季節芸術の復活者・永井荷風
Sub Title	Kafū with an eye for seasons
Author	持田, 叙子(Mochida, Nobuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2019
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.116, (2019. 6) ,p.113 (152)- 116 (149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2018年度藝文学会シンポジウム「慶應義塾文学科教授・永井荷風」 開催日: 2018年12月14日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0113">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01160001-0113</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 季節芸術の復活者・永井荷風

持田 叙子

季節のうつろいを愛することは、江戸時代の万民のたしなみであった。四季にちりばめられる年中行事もたいせつにされた。

女性に人気の雛祭りも、もっとも盛大に華やかに祝われたのは、江戸時代中期ごろからである。こうした季節美をことほぐ伝統は、一気に欧米の殖産興業に追いつこうとする明治時代に寸断された。雛祭りをはじめとする五節供に禁止令が発されたのが、その象徴である。行き過ぎた合理と科学の精神が、古代以来の列島の季節の文化を無価値の古い因習として切り捨てた。

永井荷風の文学者としての大きなしごとの一つは、日本近代に殺された季節へのいつくしみの伝統を、戦争に奔走する時代に喰い込む平和の象徴として、モダンに蘇らせた点にある。

荷風文学の芯には俳句が高らかにそびえ立つ。父祖の教えでジュニアのころからたしなんでいた。中国と日本の血を引く友だちに誘われ、十九歳のときに巖谷小波ひきいる文芸会に入った。

ここは小説の鍛錬会であるとともに、小波の趣味で俳句をまなび、楽しむ会でもあった。江戸の俳諧の流れをくみ、俳句を詠みつつ種々のゲームを皆でした。仮装して下町を練り歩いたり、荷風は俳諧の伝統から笑いとゆとりの文化を学んだ。いずれも近代に勃興した、まじめでリアルを旨とする〈小説〉にはない要素だった。

『すみだ川』『溼東綺譚』『雨瀟瀟』をはじめ荷風の主な小説にさえ、いかに深沈と俳句あるいは俳諧の要素が染みこんでいるかについては、俳諧研究家の加藤郁乎氏の『俳人荷風』（岩波現代文庫）によく述べられている。



荷風はおびただしい数の俳句をつくった。彼の人生にはつねに俳句があった。加藤氏はそれらを該博な識見により、江戸俳諧の系譜と結びつけて考察する。

小考ではおそまつながら、逆をこころみたい。荷風の生きた近代という時代のなかで、彼が俳句にふかく執心した意味を考えてみたい。

まず一つ、それが小さな芸術であるから、荷風は俳句を鍾愛した。大日本帝国、大逆、大将、大臣……およそ大と付くものへの嫌悪が荷風に

はいちじるしい。

絵も大絵画なんか、ごめんだ。部屋にそっと吊るせる可憐な浮世絵が好き。火鉢や置きごたつ、枕びょうぶなどの小さな家具が好き。武家屋敷風のいばった家もごめんだ。路地の小さな家、すぐ壊れる竹や木でできた小さな柴折門が好ましい。

<大>に対する<小>のよさの提唱は、荷風文学の随所に見られる。そこにはもちろん単なる嗜好以上の寓意がこもる。

たとえばそれは、大きく強く富もうとする日本の帝国主義への批判である。あるいは威張って市民を足蹴にする軍人政府への批判、国家という大きなかたまりを、個人という小さな点の集合体の王にする意識への反乱である。

俳句はまさに、よき<小>のシンボル。しかもこの可憐な詩形には何よりもなみなみと、四季に恵まれた列島の季節美のエッセンスがしまわれているのだ……！

荷風は大自然にはさして興味がない。庭と庭に生える木々や草花、市民が楽しむために植えられた街路樹、公園の草木、神社仏閣のみどりと花を愛する。

つまり人間とともに暮らしのなかに息づく草木や花、虫を愛する。俳句的である。市井の生活のなかの自然をいつくしむ。それを日本人の平和を愛するところの伝統であると評価する。

荷風は随筆文学のお手本として、王朝時代の清少納言の「枕草子」と、中世の隠者文学の「徒然草」にふかく学んでいる。とくに両者に共通する、季節の情趣と暮らしの機微への省察にふかく汲む。

江戸の俳諧文学のみならず、その一つの母胎ともいえる和歌文学の系譜をひく季節文学にも、荷風はつながっている。荷風すなわち江戸文芸、のみの見方はやや気が早い。なにしろ彼は太平洋戦争中に、「新千載和歌集」なども読んでいた。和歌における季節感の泉も飲んでいた。

列島に特有の歌や俳句などの小さな詩形は、父祖より口うつしに授けられたごく自然な知恵である。そしてその貴さを彼に新鮮に気づかせたのは、若き日のアメリカとフランスへの留学体験であった。

帰国後、荷風は「三田文学」の主幹となり、みずからも精力的に作品を発表する。欧米の季節を体で知る目で、あらためて列島の湿度おおい風土と特徴的な四季のうつろい、それを土壌とする芸術を得た季節のある種エキゾチックに新鮮にとらえる作品ばかりである。

「花より雨に」「春のおとずれ」「来青花」「狐」「牡丹の客」「散柳窓夕映」「夏の町」「冷笑」「海洋の旅」「日本の庭」「妾宅」「大窪だより」「日和下駄」「すみだ川」など、枚挙にいとまない。いずれの小説・随筆・紀行文・俳文も、東京の四季の景観や風俗への新鮮なまなざしを軸とする。

新緑、四季それぞれの月と星、落葉、ひらき散る花、庭の木に飛来する小鳥たち、夏の青く冴えた川の流れ、水たまりに映ってかがやく夕日の色……。

荷風の目はこまやかで繊細だ。自然の色や光を鮮明にとらえて心の鏡に写す。嗅覚も個性的である。秋の花の匂いを、首にまつわる柔らかい「絹のよう」と感ずる。

うつくしい四季の自然を賞美するところは、平和をたのしむところに通ずる。庭は、個人のたのしい生活の拠点である。空にかがやく星は、地上の争いと無関係にうつくしい自然のシンボルである。

六十代に入って体験した最もおおきな戦争——太平洋戦争のなかで、自然のつねに変わらない美しさをあらためて痛感した。町をあるくと、本数のまれになった電車に乗ろうと、人を押しのけて走る人々を見る。

こうなっては東京も終わりだと思う。そんなとき、いつも荷風は帰宅する前に門のところで立ち止まり、星や月の光をあおぐのを習いとした。永遠のかがやき

に感動し、こころを浄化した。

「虫の声」「枯葉の記」など、戦争中に火鉢でひとり手を温めながら、家の随所で鳴くコオロギや、庭の落葉枯葉をいとおしむ思いをつづった。季節美への感慨を、平和への願いにつなげた。

敗戦後に移住した千葉縣市川の空襲をまぬがれた田園のひなびた美しさにこころ癒され、荷風は「断腸亭日乗」に初夏の木や花の清麗をうたう、このような和歌や俳句を詠んでいる。彼のこころの奥で季節の美しさが、人の世の争いと関わらない平和の象徴として輝くことが、よくうかがわれる。

一人住む菅野の里は松多し君もきて聞け風のしらべを

昭和二十一年四月二十二日

世のさまも知らぬ顔なる牡丹かな

戦ひに国傾きて牡丹かな

同年五月十日

[シンポジウムのお話をもとにする書き下しです]